

# 《Ashi ～足がもたらすもの～》 栗山 正樹

「足（あし）」に注目したのは、自分が「足（あし）」フェチだからかもしれない、陸上競技を経験して「足（あし）」と向き合い、知識を深めてきたからかもしれない、幼い頃に乗り物に頼らず、歩いてきたからかもしれない。

「足（あし）」の付け根からつま先にかけての流れるようなフォルムに美を感じる。その中でも理想の形というものが存在する。あくまで自分の中の理想だが、それは、性別によって異なり、生き物によって異なってくる。ここでは、本作から逸れるため、美については追求しない。

「足（あし）」は、生き物の生活の核たる位置にあると考える。人間を取り上げて考えれば、「足（あし）」への依存度が高く、『立つ』『歩く』『走る』『跳ぶ』といった動作が、生活の幅を広げている。幅が広がった結果、人間は旅に出かけるようになった。食料を求めて行動範囲を広げ、新しい土地を求めて歩みだし、知識を求めて長旅をするようになった。

今日では、乗り物が活躍するようになったが、便利さの代償として、歩くことでしか気づけなかったものを見落とすことになった。特に旅をする上では、歩いて観ることで、生身の身体をもって感じ、体験することで、記憶の奥深くへと浸透するものへと変わっていくのだ。歩くスピード感だからこそ、手に入れることができるのだ。

これだけ生活の中心にある「足（あし）」だが、ケガをしたり、失ってしまうまで「足（あし）」の大切さに気づけないでいる。意識の外側の存在になってしまっているからである。当たり前になってしまったものを自分の意識下におくのは大変難しく、きっかけが必要である。本作は「足（あし）」の存在を再認識することを目的としている。「足（あし）」を必要以上かつ、現実離れた次元で強調することで、「足（あし）」に意識を向けることを意図している。意識を向けることで、無意識に生えている「足（あし）」と印象から、変化してほしい。

